

幕末から明治初期の国内留学事情

— 洋学修業を志した津軽のサムライたち —

保 村 和 良

Sons of Tsugaru-clan from the late Edo through the Meiji period:

— Examples of diversity in their Western studies —

Kazuyoshi YASUMURA *

Key words : 津軽の洋学	Western studies of Tsugaru
国内留学	Domestic study exchange activity
藩費留学生	Clan-financed students
私費留学生	Privately financed students
幕末から明治初期	The late Edo through the Meiji period

はじめに

弘前藩に於ける維新前の国内留学の修業内容は江戸を中心とした私塾での海軍術、砲術、航海術、佛式操練などが主なものであった。維新後になると青年士族たちの修学目的が洋学や語学が主な学科内容と変化するようになり、より高度な教育を求めて開成学校から大学南校、さらに医学修業のための医学校から大学東校と当時の教育制度の変遷と共に生徒の留学先も変化していった。

本稿で第一に取り上げたのは余り知られていない全国の諸藩から選抜された「貢進生」制度である。南校に派遣された遊学生の中には私塾を終了後、福澤塾と兼学した生徒もいた。洋学を志す為にはその基礎となる英学修業の必要性から外国人から直接学ぶことができる横浜を遊学先を選びさらに東校で医学を学んだケースもあった。

留学については藩費・私費に関わらず藩の許可が必要であるが、私費については後述の例でもわかるように「勝手タル可キ事」の扱いが弘前藩の方針であった。藩費による留学の場合は藩による厳選なる選考によって俊秀な者を選び派遣するので本人の希望は全く聞き入れられなかった。

「藩費ヲ以テ他國ニ就學セシムルコトハ寛政巳來維新ノ際迄常ニ之レアレドモ學官及典句或ハ生徒ノ中ヨリ其學力俊秀ノ者ヲ撰ンテ命セシ故望ミテ得ヘキコトニアラサリシナリ尤私費遊学ヲ願フ者ハ之ヲ許セリ」

『日本教育史資料 壹』(舊弘前藩学制)

先行研究としては「慶応義塾福澤研究センター」の坂井達朗氏の『幕末・明治初年の弘前藩と慶応義塾—「江戸日記」を史料として—』がある。本稿で使用した史料は弘前市立図書館所蔵の①「江戸日記」(寛文八年～慶応四年)②「御用留書」(慶応四年～明治三年)③「東京面よりの御用状扣」(明治四年正月～七月)④「諸稟底簿」(明治三年六月～明治四年十一月)の以上四点である。

蘭学から洋学に転換した当時の弘前藩の事情と国内留学と留学生に焦点をあてながら津軽の将来を思い、日本の近代化の推進者として勉学に励んだ若き士族の事跡を中心に進めていきたい。

注)「留学」か「遊学」かであるが『江戸日記』『東京よりの御用状扣』では「留学」と記してある。『旧事務日誌』では「遊学」となっており統一されていない。注)藩外で学ぶことについても「修業」「修学」「勤学」等ある。

1

短命に終わった「貢進生制度」

「貢進生」の意味は『広辞苑』によると「人材を推挙すること」とある。すなわち各藩に於いて優秀な生徒を選び中央政府に「たてまつる生徒」という意味になる。この制度の時代背景からみると、明治三年七月二十七日に太政官より各藩に通達があり、優秀で壮健な男子（16歳から20歳まで）を大学南校へ出して教育させることが目的でありこれが「貢進生」の濫觴であった。「日本の近代高等教育の原点に相当する存在である（中略）この貢進生は近代的な統一国家に基づく近代学生の原点、国家的観点からのエリート産出の原点ともいべき性格のもの」であった⁽¹⁾。

それでは各藩には実際にどのような通達がなされたのか弘前藩の場合を見てみよう。

告

大学南校ニ於テ外國語教師御雇相成人材成育被為在候間藩々ニ於テ

現高拾五萬石以上 三人

同 五萬石以上 二人

同 五萬石未満 一人

右之通拾六歳以上二十歳マテ人材相撰、来ル十月迄ニ南校ヘ可差出候⁽²⁾、(以下略)

各藩から選ばれた貢進生は310人であったが、内訳で見ると英語(219名)仏語(74名)独語(17名)の三課程に分かれていた⁽³⁾。

南校では語学中心の教科課程であったため授業は相当厳しいもので合格点に満たない者は六週間後に再試験を受けなければならなかったり中には挫折したり病気で中退しなければならなかった貢進生もいた。

- (1) 『貢進生—幕末維新期のエリート』唐沢富太郎
「ぎょうせい」昭和49年
(2) 『大政類典第一編第百十九卷学制生徒』
国立公文書館
(3) 前掲(1)序1

2

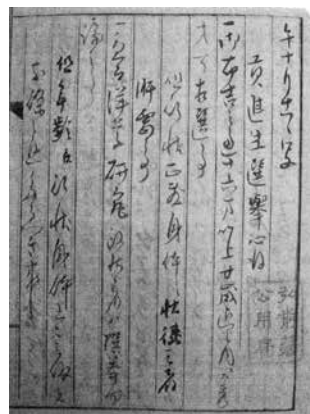
『弘前藩貢進生一件記録全』と『貢進生猶豫願藩名』⁽¹⁾

これらの史料には「写」とあり、「選挙心得」には下記のように書かれ、「願書提出」用の「雛形」も添付されている。

史料

- 一、御布告之通十六歳以上廿歳迄内秀才可相選挙事
但行状生鏹身體壯健之者之肝要之事
一、兼テ洋学研究致居ル者右ハ撰挙勿論ノ事
一、是迄南校ヘ差出置入舎生ヲ改めて貢進生と致
度向ハ其段可願出ト之事
但大中小藩ノ人員定数之除ハ其生徒限リノ員
外生として是之通置候亦願出事
一、右是迄入舎生ヨリ改テ貢進生と致し候分は其
者之浅深によりテ大凡廿ニ歳ハ差許可申
右ヨリ長年ノ分ハ員外生勿論之事
一、在学生年限五年是心得ヲ以可差出事
一、貢進生学費之多少ハ藩々之便宜ニ任スト
雖トモ一ヶ月十兩ヨリ以下ニ下ルヘカラス尤
右ハ一ヶ月四度ニ纏メ當校会計迄之選出ノ事
但外ニ課業書籍代一カ年大凡五十兩程ニ
右ハ豫メ差出置ニ及事
一、右生徒病氣ノ節ハ一應本校医官ニテ治療相加
可申候得共長病等ニ相成候節ハ藩々ヘ引取申
可候事
一、缺員相成節ハ代員貢進可致事
一、今度入舎之節左之證書可差出事

年齢は16歳から20歳ぐらいまでとして既に洋学の心得のある者であること。藩の石高により選抜者に限りがあり在学年数は5年として、藩からの学費援助は一ヶ月一人当たり10両を下らないとしている。また書籍代として一年間50両を南校へ納入しなければならなかった。



「貢進生選挙心得」

- (1) 弘前市立図書館蔵

3

「学費」と「遊学公費生徒氏名」

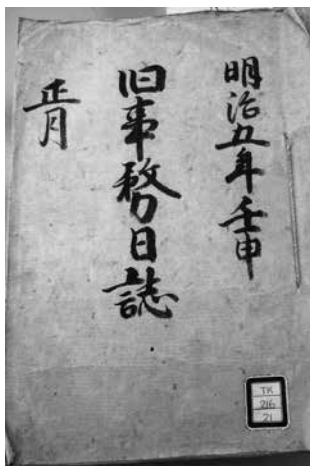
生徒一人当たりにつき一ヶ月三人扶持、菜金(授業料)は五両、塾への謝礼金は三両であった⁽¹⁾。

史料

1	工藤勇蔵		
2	川村善八	(南校)	明治3年10月
3	佐々木 正	(南校)	明治4年
4	乳井敬一	(佛学)	明治3年8月
5	佐藤恭助	(南校)	村上英俊塾(佛語)8月入学 後退学
6	佐々木元龍	(東校)	西洋医学 明治3年8月
7	山崎義庵	(東校)	明治3年10月
8	佐藤元清	(東校)	明治3年12月
9	伊崎文徴	(東校)	明治3年12月18歳
10	桜田道齋	(東校)	明治3年12月15日19歳
11	寺田末四郎	(南校)	明治4年6月
12	笹森愛太郎		
13	山澄吉蔵	(佛式操練)	慶應2年12月友平塾 文久3年2月勝麟太郎塾
14	奈良忠平		
15	梶 鋭八	(静岡藩)	明治4
16	中田謙三	(静岡藩)	明治4
17	原 経蔵	(静岡藩)	明治4
18	湯浅正景		

右之通候也
元弘前縣旧事務掛
明治五年申年三月 中畑金賓 印

弘前市立図書館
この原史料には氏名
のみの記載であるが、
可能な限り留学先、入
学年月、年齢、兼学入
塾名を付け加え、『幕
末・明治初年の弘前藩
と慶應義塾』を参照し
た。



次の史料は前掲の別項目として記載されている「廃藩置県前より各所遊学生徒各員名」である。

史料

1	武藤雄五郎	(慶応)	明治2年8月20日19歳 明治3年(静岡藩)
2	柏原仲蔵		明治4年4月 洋算
3	小笠原東五郎		
4	矢嶋源四郎	(村上英俊塾)	佛語 退塾
5	三浦良太郎	(南校)	明治3年7月
6	青山伴蔵	(南校)	明治3年7月
7	成田久太郎		
8	手塚莊敬	(静岡藩)	明治4年4月
9	工藤昂蔵		
10	太田常吉	(静岡藩)	明治4年5月
11	山田 誠		
12	渋江 保		
13	須藤保次郎	(慶応)	
14	津軽 薫	(村上英俊・佛語)	明治3年1月 箕作(佛語) 明治3年7月(南校) 明治3年9月
15	本多庸一郎	(横濱)	
16	成田五十穂	(横濱)	
17	津軽金太郎		
18	津軽熊一		
19	津軽八十五郎		
20	山上俊泰	(英学)	明治3年8月

右之通二候也
明治五年申年二月
元弘前縣旧事務掛
中畑金賓 印

「私費」⁽²⁾による留学生は下記の通りである。

- 1 中田謙三
- 2 成田久太郎
- 3 原 純造
- 4 小笠原藤五郎
- 5 小山内雄五郎
- 6 菊池三郎
- 7 柏原
- 8 山上俊泰
- 9 渋江道純
- 10 津軽金太郎
- 11 津軽熊一
- 12 津軽八十五郎
- 13 本多庸一郎

1) 『旧事務日誌 明治五年壬申 正月』

弘前市立図書館蔵

2) 『桜庭太次馬日記』 弘前市立図書館蔵

4

『福澤塾入社名帳』にみる弘前出身の留学生

この「入社帳」は文久三年から明治三十四年までの膨大なもので初期の段階に於いては書式が統一されていないが筆跡から当時の青年士族の覇気を感じ取ることが出来る基礎史料である。

1	木村建太郎	二十二歳 (ママ)
2	佐藤弥六	三十歳 (ママ) 四年五月十八日
3	菊池九郎	十九歳 二年八月廿日
4	武藤雄五郎	十九歳 二年八月廿日
5	寺井純司	十八歳 同
6	出町大助	十七歳 二年十二月九日
7	鎌田文治郎	二十二歳 同
8	須藤寛平	二十二歳 同
9	須藤保次郎	十八歳 四年五月三日

『入社帳無罪紙本 自文久三年至慶応四年四月』姓名録

1	吉崎豊作	慶応元年正月入塾	* 1
2	神 辰太郎	慶応元年 五月廿日入門	* 2
3	佐藤弥六	同 五月廿日入門	* 3
4	白戸雄司	同 六月二日入門	
5	笹 衛之助	同 八月	* 4
6	樋口左馬之介	同 十月十五日	* 5
7	三浦才助	(清俊)慶応三年七月六日	* 6
8	田中小源太	慶応三年 七月六日	* 7
9	菊池九郎	明治二年 八月廿日	十九歳
10	武藤雄五郎	同 八月廿日	十九歳
11	間宮求馬	同 八月廿日	十八歳
12	寺井純司	同 八月廿日	十八歳
13	出町大助	同 十二月九日	十七歳
14	鎌田文治郎	同 十二月九日	二十二歳
15	須藤寛平	同 十二月九日	二十二歳
16	青沼欽之助	明治三年十月三日	十七歳
17	武田虎彦	十二月十四日	十八歳
18	木村建太郎	明治四年五月三日 三十二歳ママ*二十二歳 の誤記と思われる。	* 8
19	須藤保次郎	同 五月二日ママ	十八歳
20	竹森徳馬	同 五月廿三日	二十二歳
21	小山内敬三	同 六月二十三日	二十二歳
22	小野武衛	同 七月三日	十九歳
23	篠崎左一	同 七月三日	十九歳

以上『入社帳』を基にまとめてみたが生徒の中には「福澤塾」と兼学の形で他塾で修業したケースもあった。入塾件数としては明治二年と四年に集中していることがわかる。また間宮求馬や武藤雄五郎の場合は明治五年以降弘前藩と深い関わりをもつようになる静岡藩に留学している。

- * 1 慶応元年一月武田斐三郎塾にて築城・航海術を修業しているが兼学したものかどうかは不明。
- * 2 明治4年には手塚と改名。慶応元年正月名村五八郎(蘭学・英語)にて修業。『幕末・明治初年の弘前藩と慶応義塾』p208
- * 3 佐藤弥六については慶応元年閏五月二十日に福澤塾に入社しており文久二年十一月に勝麟太郎の塾にて修業。前掲 p201
- * 4 文久二年七月大鳥主助の塾にて蘭語を修業。前掲 p203
- * 5 文久二年十一月勝麟太郎塾(海軍・軍艦操練所など)同二年十二月矢田堀景蔵塾(航海術)前掲 p200、p201、p208
- * 6 三浦才助と同一人物である。三浦は福澤が「雷銃操法」を翻訳した際に鉄砲の組織構造を教授したというエピソードがある。維新後は政府に出仕したが辞職後は印刷業を起業。前掲 p241
- * 7 前掲 p208
- * 8 明治四年頃から各生徒は藩邸、借家から通学している。入社記載項目に「宿所」が追加されている。木村は三田二丁目六番方に寄宿。『入社帳』では明らかに三十二と読めるが『貢進生猶豫願藩名』には二十二歳と記載されている。

5

佐藤弥六と福澤諭吉の出会い - 当時の東校・南校史料 明治元年九月廿五日

「・・佐藤弥六郎(ママ)罷越候。ピストルも買入候積り。此人ハ御承知も可有之、フェースフル之人物ニ御座候。厚く御周旋被成遣可然奉存候。塾ニ居候人として尽く正しき人物斗リニ無之、道モスレバ不正不信之ものも出来申候。人物之見分ケ、交も自から厚薄有之義御心得迄申上候。」

佐藤弥六と面会した福澤は弥六を「フェースフル」(faithful-「信頼のおける」)誠実な人物と見ている。当時の洋学者達に対するテロ行為を警戒しており、ピストル購入の事も書かれている。

『福澤諭吉書簡集 第一巻』p109

ところで福澤は当時の南校や東校をどのように見ていたのか興味のあるところである。官学の様子については次のように辛辣な意見を吐露している。

史料 ・ ・ ・私塾にて羽翼未だ形を成さずして、早晩に飛ぶ者多し。顧て南校、東校等の有様を見るに、当時南校の生徒一千人、一歳の費用三十万両に下らず。生徒壹人に付三百両の割合なり。(中略)故に学

校は公私中間の者に定め、学識ある者は才力を費し、金ある者は金を費し、双方互に相助けて教化を広くすべきなり。(以下略)⁽¹⁾

(1)『福澤論吉 百通の手紙』中央公論

6

明治初期の留学事情

当時の留学事情を紐解いてみたい。まずは南校関係者から。

出町大助（弘前藩）

福澤塾に明治2年12月入社した大助は明治3年秋南校に入学したが同4年3月、2月10日学校を出たまま帰らず横浜にいたことがわかり藩邸に連れ戻された。病がちで正則通りに学業が出来なくなり代わりに佐々木正を送る願いを出したところ許可が下りた。

史料

弘前藩伺

大學南校へ差出候當藩貢進生ノ内出町大助儀去月十日同校他出其儘歸校不致旨相聞候間早速衛相尋候處於横濱勤学罷在候同藩書生へ罷越候趣ニテ藩邸へ召連候間其段同校舎長へ相達置當人糺間ノ處近来病身罷成南校正則通り勉學難相成右様心得達二及候旨申出依之大助儀御免被仰付為代佐々木正儀貢進生差出申度此段奉候以上四年三月九日但出町大助儀（以下判読不能）⁽¹⁾

満谷鎌太郎（黒石藩）

胸痛を訴えたため加療したが、病身の身では課業を続ける見込みはないので退学願いを出し、明治4年6月10付で退学している。

史料

黒石藩願 辨官宛

南校貢進生 當藩 満谷 鎌太郎

右之者昨年撰挙ノ上貢進生仕候處春來胸痛相發度々下宿ノ上加養仕候得共■全快不仕斯病身ニ相成候ヲハ存分勉勵■成業ノ見込無御座候間■再三藩庁へ申出二付吟味ノ處全病身ニ相成候相違無違無御座候二付同人貢進退舎被仰付通當再撰■ノ上到着次第貢進仕候間宣御聞届被仰付候様此段奉願候以上四年六月八日⁽²⁾

このように退校が認められたが代わりに貢進生については沙汰があるまで出すに及ばないということであった。

満谷 鎌太郎の経歴であるが、黒石には藩校「経學教授所」が九代順徳の代に設置された。当時の学科は経學と歴史を中心としたもので生徒は7歳から17歳までを対象の生徒で全員通学生で100人程度であったという。明治二年十月に「経學教授所」は「文学学校」と呼ばれ教授陣の中に満谷鎌太郎が出てくる。やがて明治に入ると学校令（明治8年8月28日）により黒石小学校へと改称されていく。満谷鎌太郎は明治三年には黒石藩の役職に連なり第五等・傳令士の筆頭に満谷の名前が見られる⁽³⁾。なお、満谷の墓碑は黒石市の「感瑞寺」（浄土真宗）にある⁽⁴⁾。

(1)『大政類典第一編 百十九卷学制生徒』

(2) 同上

(3)『黒石市 通史篇1』p320
『黒石地方誌』p155

(4)『貢進生 - 幕末維新期のエリート』p33

7

当時の大学南校

学制改革前の中央の情勢が窺い知ることが出来るので当時の南校の校長職にあった辻新次の講演に耳を傾けてみよう。

演題「学制を頒布する迄」

「中略・・・其の時分には洋学を盛に奨励していくと云う政府の方針でありましたから、大学南校は中々盛んなものでありました。多くの生徒が入りました。そうして、英学、佛学、独逸学を教授する為に英米佛獨等の外国人を雇い入れました。教授方法も西洋の方法を用い教科書も皆外国から参りたるものを用い外国人が直ちに授業します。(中略)それゆえ外国教師の教えますものを正則と申しました。生徒は変則生、正則生と申しました。(中略)貢進生は皆寄宿舍に入れ、舎長と云うものがあって、管理しました。教場に於いては教場幹督を置き、これが監督をしました。私は南校の校長というもので事務をとって居りました。(中略)外国語で外国教師に就いて授業するもの

と訳読で教授するものがありましたけれど、変則生というものは教授せぬことになりました。外国語で外国人教師が試験して入学せしむることにしました。此の時貢進生も止められました」⁽¹⁾

(1)『明治以降教育制度発達史』教育史編纂会
p262-p265

南校ではフルベッキ (Verbeck, Guido Herman Fridolin 1830-1898) が英佛獨の教師兼教頭として勤めた。

この Verbeck を陣頭に福井の明新館からはグリフィス (Griffith)、静岡藩のクラーク (E.W.Clark) そのほかフランス人二名、英国人五名らが雇われていた。いわゆる、「お雇い外国人」であった。因みに彼等の月給はフルベッキ (600 元)、ハウス (240 元) グリフィス (300 元) マイヨ (佛語 300 元) ワグネル (独語 250 元) と当時としては破格の給料待遇であった。

日本人の教官は箕作麟祥、柳川春三、堀越亀之助、田中芳男など何れも『英和对訳袖珍辞書』の初版版に参画した明治初期に於ける名立たる英学者たちであった。

8

大学東校

江戸幕府からの教育機関であった医学所は大学東校と改称した。フルベッキの進言により東校では英語から独逸にして授業が行われ教官に二名のドイツ人を雇したが年長者向けの医学の授業には通訳をつけた。正規の生徒に対してはドイツ語のみの授業であった。

弘前藩からこの東校に入校した三名の留学生がいた。佐々木元竜、山崎義庵、小野圭庵 (横濱留学を経て) 東校へ転じた) である。長年英学寮で学び優秀な成績を修め選抜され東校に入学した例である。

史料 学校

同人共儀長ク英学寮ニ於テ勤学罷学業■擢拔致シ然■此度東京府東校ニ於テ洋醫御雇入之上醫學御更張ニ趣知仕□

『諸稟低簿 藩庁(県庁)明治三年十月一日～十五日』

9

国内留学生の「書籍」事情

明治三年十月十三日『御用留書』から南校に入学した佐々木正⁽¹⁾の書籍拝借のケースをみてみたい。

史料 書籍拝借の義申出

之通御買上被 佐々木正 山崎義磨
仰付候義ハ入目 三十八両壹歩之旨会計局
申出之通
但 義磨 申出 左候二
英文典 一冊
窮理書 一冊
英和辞書 一冊
正 申出 左候二
レーデンク ブック 一冊
英文典 一冊
英和辞典 一冊
同 十四日

注)「義磨」は「義庵」のことと思われる。

注)「窮理書」は物理書。

国内留学生たちは生活費の外に高価な図書費用を負担しなければならなかった。此の二人が購入の願い出た書籍代金は六冊の総額三十八両余であり、一冊平均六両にあたる。これは明治五年の東興義塾が開学した当時の一等教授の月給に相当する額である。従って、勤学生の経済事情を考慮して監督局が購入、払い下し、貸し出しの三通りの方法で便宜を計っていた。

(1) 佐々木正：元俊の弟 新蔵の長男である。南校在学中は後に外務大臣となる小村寿太郎、斉藤修一郎と共に南校の三才子といわれた程の秀才であった。卒業後は外国語学校の講師、山口高等商業の教授となった。弘前の慈善事業家として知られている佐々木五三郎は実弟である。

『閑雲下澤保躬先生を仰ぐ』田沢 正 p124

史料 御藩許ヨリ西京へ御登セ被仰付候 公用掛
大属

一 語学及数学要用 佐々木 正
之書籍二付御買上 三浦良太郎
之上拝借之義申出 青山伴蔵
之通被仰付候様御入目
八両貳歩仁朱
之旨 会計評議之通
単語会話 四冊
一、英吉利小文典 三冊
一、西洋算術書 四冊

上記三名は何れも南校入学者である。すでにこ

の年七月に入学している。「英語会話・単語」「英語文法書」の買い上げの依頼と拝借願いを申し出ている。九月には佐々木を除いては何れも個人の塾へ転校しているが学塾・師匠名は不明である。佐藤恭助は村上英俊（佛語）塾へ同年八月入塾のところ退塾の上南校へ転校している。個人塾で佛語を習得の上大学南校にて更なる勉学に努めた稀有な例といえるだろう。

史料 当八月ヨリ村上英俊方江入塾之上
佛学 勤学被仰付 罷有候処
同塾 教授方 追々退塾ニ相成
此上 入塾罷有候とも進学之見込
無之ニ付退塾之上 大学南校 江
通学仕度義 願之通被仰付候様
監督□□之通

明治三年十一月七日付。津軽 薫（明治三年一月入塾）も明治三年九月に南校へ転校。矢島玄四郎（明治三年十一月入塾）は「諸稟低簿」（明治三年）によれば退塾と記録されている。

津軽 薫の兼学の願いに対しては次のような書簡が残されている。

史料 幹督 仲様 津軽 薫
御手紙拝見仕候節 箕作貞二郎方へ
入塾之処塾生南校へ出勤仕候間
来月二日より
さては昼南校へ通学申候
講習並びに西洋算術共兼業仕り
度儀願い通り仰せ付け
有難く被候 以上
三月二十八日
『津軽 薫 書簡』弘前市立図書館蔵

史料 公用掛大属申出候
一、金壹百疋 知事様ヨリ
書籍御買入之上別紙之通 監正署へ引入之
上 桜田道齋 福師正京 伊崎文徴
拝借被仰付候様 会計局評議之通別紙左二
中辞書 壹部づゝ
窮理書 壹部づゝ
英和对訳辞書 一部づゝ
英文典 一部づゝ
右ハ正京 文徴 拝借之分

中辞書 壹部
小辞書 壹部
窮理書 壹部
解剖書 壹部
英和对訳辞書 壹部 英文典 壹部

桜田、福師、伊崎の三名は東校へ明治三年十二月の入校である。西洋医学に必要とされる書籍の購入であるが、専門書（物理・解剖学）を英語で読むのに必要な数種の辞書や文法書を購入している。それにしても膨大な費用を投じていることがわかる。

『御用留書 明治三庚午年 十月中 閏十月中 十一月中 十二月中』

史料 代料 渡方之義 取計候間 御聞届 被
仰付 候様 尚書籍 監正署へ
御引入 被仰付 候様 御入目 拾四両
式歩壹朱 之旨会計 評議之通
一、ベニヲ氏文典 壹冊
一、スヘルリングフック 壹冊
一、ヘホン字引 壹冊
已上

注) 『ベニヲ氏文典』は『ピネヲ氏原板英文典』のことで明治二年五月に新刻。明治三年には『英文典直譯』として慶応義塾や慶應系の私塾で盛んに用いられた。『日本の英学 100 年明編』

注) 『スヘルリングフック』は Spelling Book のことで Noah Webster の「綴字書」。日本では翻刻本として使用された。『日本の英学 100 年』

注) 『ヘホン字引』は『和英語林集成』J.C.Hepburn の編による日本で初めての和英・英和辞典のことで慶応三年五月上海で印刷、横浜で刊行された。1886年に改訂された第三版は幕末から明治初期の新語が一万語以上増補されヘボン式表記を採用。丸善商社より刊行された。近代日本語研究の貴重な文献となっている。『ヘボン在日書簡集』p179 教文館、『和英語林集成』p977 講談社学術文庫

乳井は明治三年八月に東京へ出て、佛学塾へ入り佛語の習得に努め、江戸屋敷の近くに同居人と共に「屋敷南ヨリ六番二間」の長屋を借りて勉学に励んだ。

史料
屋敷南ヨリ六番二間御長屋拝借被仰付候様（中略）
重田一学と同居・・・
一 自分物入之義二付 乳井 敬一

可申上故二無御座候
 得共洋書之義ハ高貴二而自力二
 及過候間 英佛対訳辞書 壹冊
 英和辞書 壹冊
 窮理書 壹冊
 御買上之上拝借之義 申出之通 監正
 署へ引入之上 拝借被仰付候 入目
 八両式歩 之旨 会計 評議之通
 一 公用掛 大属 申出候
 一金壹百疋 知事様ヨリ

10

本多庸一書簡と「横濱留学」

次の書簡はまだ本多が庸一郎名で留学生の監督していた頃の對馬嘉三郎宛の書簡である。本多は恐縮しながらも月奉の催促を訴えている。学費や必要な書籍の購入など何かと出費多難な頃の当時の状況が行間から伝わってくる。

史料

急貴

對馬嘉三郎様

本多庸一郎

其後如何被過候也
 無御滞帰郷之義と
 奉遠察候扱毎度なから
 月奉催促之ため会計まで
 差出候間猶厳具御命令
 奉願候
 毎度恐縮ながら先達
 而下沢氏江月末出費の
 積高給出斗之義相頼
 候間咄出来二相成候半と
 遠察仕り候随テ小生月奉未ダ御運送
 前二候ハバ右より給与丈差引
 之上宜しく御配分被成下度
 若シ行違二相成候ハバ是より早
 可差上候給与ハ早速御運送
 被成下度 其外佐藤様を以て
 申上候早速御報被成下度
 奉願候 頓首

十月朔日 庸逸生

對馬 先生

(注) 明治三年十月朔日

注) 『本多庸一書簡 對馬嘉三郎 宛』弘前市立図書館蔵

注) 文中「佐藤様」とは上述した佐藤弥六のことである。

史料

弘前藩士

本多庸一郎

成田五十穂

小野圭庵

三上道春

長谷川良吉

八戸岩太郎

津軽 薫

寺田末四郎

山崎義庵

右者於横濱港二洋

学修業為仕度比候

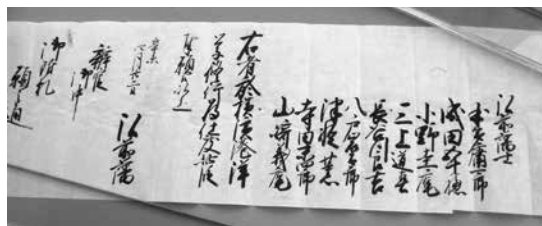
奉願候 以上

辛未 四月廿二日 弘前藩

辨官 御中

御附札

願之通



(写真 No3 『東京ヨリの御用状扣』四月廿九日付添付書)

史料

四月四日

弘前藩士横濱二於テ洋學修業印証ノ手續

弘前藩伺

弘前藩士

本多庸一郎 成田五十穂 小野圭庵 三上道春

長谷川良吉 八戸岩太郎 津軽薫 寺田末四郎

山崎義庵

右之者ハ是迄藩印所持於横濱港洋學修業罷在候為
 此度外務省神奈川縣ノ内印鑑所持無之テハ留學難
 差許段同縣ヨリ達有之旨申出候然ルニ右等ノ儀ハ
 今以御布告無御座候ヘトモ前書達ノ趣モ有之候間
 留學相成候様同縣へ御達被成下度此段奉願候以上
 四年三月廿九日

この史料には九名の弘前藩士の内印鑑不所持により英学修業は許可はできないとの通達が神奈川県よりあったが留学ができるように速やかに許可願いを提出する旨の内容である。

この件に対して外務省よりの回答は次のようなものであった。

史料

外務省回答 辨官宛

弘前藩士横濱港於テ洋學修業罷在候處此度當省神奈川県ノ内印鑑無之テハ難差許段同縣ヨリ達有之趣ヲ以テ御官へ願出候二付之迄ノ次第御打合ノ趣致承知候右ハ神奈川県へ及問合候處同縣ノ規則ニハ政府并當省許可ノ証書ヲ以申立候ハバ差許未候處同藩士ハ願済ノ証書無之ニ付今般留學差止メ候儀ノ由返答申越候間此旨同藩へ御沙汰有之度候此段御答申進候也 四年四月

尚々弘前藩ヨリノ願書御返却申候

『太政類典第一編百十九卷索引學制 生徒第一』

(国立公文書館)

神奈川県の規定によると外務省の認可証が提出されていないので留学は差し止めの状態にあることを弘前藩に伝えており目下その返答待ちであるとのこと。したがって追って願書を再度送付するとの回答であった。

下記の史料は本多庸一の二回目の横濱での英学修業の父東作より弘前支庁へ出された『英学修業願』である。

史料 英学修業登願

倅

庸一儀

東京表二於テ英学修業為

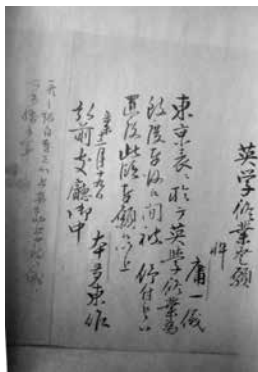
段度存奉候間被 仰付下

置度此段願之 以上

辛未十二月十九日

本多東作

弘前支廳御中



(写真 No4 「英学修業願」)

(青山学院資料センター蔵) 筆者撮影

この史料は父東作が二度目の庸一の英学修業のために書画骨董を売払っての「私費」による留学で

あった。

この許可願いに対して弘前支廳から下記のような朱書きによる回答があった。

願い趣自費を以て上京勤学此之義ハ勝手タル
可キ事 印小出 印樋 印徳の押印

次の史料は明治三年に廃藩置県以前に藩費によるもので成田五十穂とともに横浜留学に関する会計局への回覧文書である。

史料 『御用留書』 明治三庚午年

一 本多庸一郎 成田五十穂儀
横濱表におゐて留学被
申願 尤入費之儀ハ取調申出候
後之様 通達可有之候
十月九日 唯一
幹督中
今之義 会計局江知ら世申遣之

注) 成田五十穂は明治五年青森縣廳へ「義塾取建之儀」を提出した際に吉川泰次郎と共にその名前が見られる。開学時には結社人の一人として副幹事をつとめた。

注) 唯一は岩淵唯一 (1838 ~ 1917) のことで弘前商業会議所初代会頭。この頃弘前藩知事のもとで正参事に任命された。『青森県人名大辞典』

史料 『御用留書』 明治三庚午年

一 明朔日 本多庸一郎 成田五十穂
義横濱表へ罷越候義二付
横江諸入用奈らひい
明三日同所へ罷越候義二付夫々
相済候事

上記の関連史料として当時の弘前藩の洋学に対する思いは他藩に遅れをとるまいと津軽承昭公は少壮者を選抜してアメリカ、ヨーロッパに派遣の計画があった。なお、この計画は財政上実現できなかったが上記の三名の名前が挙がっていた史料がある。

史料 『東京よりの御用状叩』 明治四年正月~七月 御用覚

一、津軽薫、本多庸一郎、成田五十穂、米利幹二において英学取調被申付候、尤洋期限之儀ハ追而可被申付旨被申付候

一、小山内元洋儀 欧羅巴江罷越 医科研究被申付候 尤

期限之儀 追而可被申付旨申付候

六月十二日 大参事御中

注) 小山内元洋 陸軍一等軍医、弘前の町医であったが、幕末の際に小普請医者として津軽家に抱えられた。弘前藩の蘭医佐々木元俊の門に入る。西南の役には一等軍医として広島鎮台病院長となった。明治五年ドイツ医学書より翻訳書あり。『陸奥史談』第三八号 陸奥史談会 p27

おわりに

幕末から明治初年かけて弘前藩から派遣された国内留学生（藩費、私費を含む）の実態をみてきた。留学生達は藩の大いなる期待を背負い必死に勉強に励んでいたことに感動を覚えると同時に、勉強に必要な「書籍入用願い」の中に彼等の熱意が読み取れる。勤学生たちが願い出た書籍名は今後の津軽の「英学史」の研究においても貴重な史料と言えよう。

やがて時代の流れから弘前藩では洋学の教育政

策とし福澤塾や静岡藩より漢学や英学教師を招聘することに方針転換をしていくことになる。

紙数の関係上とりあげることが出来なかった「静岡藩」や「鹿児島藩」への留学生については更なる原史料の渉猟に努め次回に譲ることにしたい。

参考文献

- ・『私塾』Shijuku R・ルビンジャー（サイマル出版）
- ・『日本英学のあけぼの幕末・明治の英語学』
惣郷正明
- ・『本多庸一』青山学院
- ・『青山学報』135号 1987、10
- ・『東奥人名録』成田彦一・安西如鳩 編
- ・『明治文化全集 第十六巻』外国文化篇 p349
- ・『東奥義塾史報』創刊号 1996年2月